

太白

TAIHAKU

旅館における防火管理

株式会社 ホテル佐勘 代表取締役社長 佐藤 勘三郎

ホテル旅館の防火整備の歴史は残念なことに幾多の火災によって誕生したものが少なくありません。古くは（と言っても昭和40年代ですが）有馬温泉にある「池之坊満月城火災」。昭和43年11月に起きた火災ですが30の方が亡くなっています。川治温泉にある「川治プリンスホテル」の火災を覚えている方も多いかと思います。昭和55年11月に起きた火災で45人の方が亡くなりました。非常ベルは鳴ったのに「まさか自分がそのような場面に出くわすわけがない」という今で言う「正常化バイアス」が働いてしまったことが逃げ遅れにつながり大惨事になったという調査もあるようです。

東北でも旅館火災は少なくありません。福島県の磐梯熱海温泉にある「磐光ホテル火災」は昭和44年2月に起きました。収容が1100人という超大型ホテルで起きた火災では30の方が亡くなっており、また昭和58年に起きた蔵王温泉の「蔵王観光ホテル火災」では11人の方が亡くなりました。2月という厳寒期に起きた火災で消火用水が凍結（気温は氷点下7℃）して消防活動ができなかったという不幸もありました。

こういったホテル旅館火災が大きな災害になってしまった理由には幾つかの傾向があります。ひとつは火災警報器や消火栓、避難設備の不備があったこと。的確に起動していれば防げたかもしれない火災ですのでいわば人災とも言えます。二つ目は迷路のような館内。建て増しに次ぐ建て増しをした旅館は

一種の迷路状態です。しかもお客様は多くの場合初めて訪れる宿で方向感覚すらありません。正確な避難通路を把握することは困難です。三つ目は火災の時間帯ですがほとんどの場合、夜半から深夜にかけて発生しております。尚且つその時間帯にはお酒が入っている場合が多く、正確な状況把握もままならぬものがあります。

そのような困難があることを承知の上で私たちホテル旅館事業者は防火管理を行わなくてはなりません。火災警報器やスプリンクラーの適正な設備は当然のこととして、常に「アルコールを召しあがった方がいる」「身体が不自由な方もいる」「高齢で身体機能が必ずしも万全ではない方もいる」「外国人の方もいる」ましてや「英語も通じない外国人の方もいる」という事を意識した避難誘導の在り方が必要になってきます。その意味で私たちが想定すべき事象は確実に増えてきているはずですが現場レベルで追いついているかどうかは甚だ不安です。防火に対する意識をもっと上げる必要があると痛感しております。

今から400年ほど前の江戸前期、弊社で主屋を焼失する火災が起きました。その戒めを忘れることのないように祖先は高野山から「貧女の一燈」といわれる「灯」をいただき、それを絶やさぬように燃やし続け現在に至っております。防火に対するモチベーションをどう保つか、先祖から試されているかのようです。



はしご自動車による救助訓練



館内案内表示



【佐勘の家宝「聖火」400年絶やすことなく守り続ける】